
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第177号

-環境・農業・食べ物など情報の交流誌-

2006.02.11 (日) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm

*****発行部数 **** 部*****

□ 目次 □-----

<お詫びとお知らせ> 配信遅延のお詫びと次号配信日のお知らせ

<巻頭言> 郷土博特別展の染谷亮作伝 石川 秀勇

<読者の声> 長谷川さんから

<80才からのメッセージ> 近藤康男の大養生・106歳の健康法 原田 勉

<野火止用水開通の風景> その2 用水通水3年説 安富 六郎

<老兵の戯言> 研究のねつ造 藤原 昇

<編集後記> 117号から引き継いで2年4ヶ月余り60号目です。

<お詫びとお知らせ> 配信遅延のお詫びと次号配信日のお知らせ

●配信遅延のお詫び

原稿をいただいた皆さんに遅れはありませんでしたが、編集部の都合により
3日も配信遅延してしまいました。執筆者・読者のみなさんにお詫び申し上げます。

◎『電子耕』は、配信システムを「まぐまぐ!」と「RanSta」に頼っていますが、
このたび「RanSta」が同じ運営会社の「melma!」に統合されることにも
ない、次号178号は定期発行日2月23日はシステム移行・配信不能期間(2月23
日(木)00:00~2006年2月26日(日)24:00の間)にかかると発行日を1日早め
ます。原稿締め切り日も前倒しになります。

178号の締め切りは2月17日(金)、発行は2月22日(水)予定になります。
よろしくお祈りします。

『電子耕』編集部

< 巻頭言 > 郷土博特別展の染谷亮作伝

昨年秋、野田市郷土博物館で特別展「野田人物伝」が催された。郷土ゆかりの藩時代の歴史上の人物、大正から昭和初期の年代に業績を残された音楽家、つい先年物故された画家、といった多様な30名の紹介である。その一人に、市内旧川間村で地域の自治に尽くされた染谷亮作翁が含まれていた。「川間」の地名は、江戸川と利根川に挟まれていることからとされ、当方の所在地もこの地域内にある。

翁は、明治9（1876）年にこの地の大農の長男として生まれ、昭和34（1959）に83才で没した。喜寿を迎えた昭和27年に、文筆家を煩わせて自伝を残され、詳しい足跡を伝えている。その一部を記すと次のようである。

明治28年に千葉中学校を卒えると、東京帝大の農学乙科に進み、32年に同大農学実科を卒業。その後、広島県の農業団体、愛知県の農林学校、国の農事試験場などに奉職。郷里に戻ったのは明治40（1907）年で、その事情は父の死からであった。

それから大戦前の頃まで、村会議員や村長、そして教育関係や農業関係のいろいろな委員など村の様々な役職に就くなどされた。その貢献は各般に及んだが、今では当たり前になっている郵便局や診療所、駅、通学道路といった地域に欠かせない施設の設置も、翁の献身的努力の賜物というも過言でないとのこと。

つまりは、地域の人々は晩年の翁に対して、“川間の西園寺（元老・西園寺公望公）さん”とか、後には“川間の尾崎（尾崎行雄翁＝憲政の神様の異名）さん”と呼ぶようになった。それは、翁が多年にわたって村のこと土地のために力を傾け来たったからで、それゆえに元老として扱われ最長輩として遇せられた所以であろう、と言う。

翁のような偉人が、自分の今住む地におられたことを知り、その生涯に万感の念を覚える。

石川 秀勇

（山崎農研会員 千葉県野田市在住）

y.nouken@taiyo-c.co.jp

<読者の声>

●長谷川さんから；

2006年ももうひと月が過ぎてしまいました。

毎日忙しくしていますので、日の過ぎ行く早さにいつも驚いています。

皆様お変わりございませんか？

大雪に驚かされたり、インフルエンザが猛威を振るい始めているとか、先行き不安を感じる1月でしたね。

でも歩いていてすばらしい蠟梅の花を見つけました。

春はもうすぐそこまで来ているのですね。

又いろんな花を楽しみながら忙しい日々を乗り越えていきたいと思っています。

「夢のかけら」を更新いたしました。

お時間がございましたらのぞいてみて下さい。

皆様お風邪など召しませんように。

♪☆♪長谷川直子♪☆♪

「夢のかけら」

<http://www.h3.dion.ne.jp/~nanchan/>

<80才からのメッセージ> 近藤康男の大養生・106歳の健康法

近藤先生は106歳で大往生され、鬼籍に入れられた。各方面から追悼文が寄せられて、今や歴史上の人物となられた。

それにしても106歳という長命は、希有の存在であった。今改めて、その長寿の秘訣はどこにあったのか、我々後輩として、真似できるのかを探ってみたい。

(1) 長男、淳さんの証言 (週刊新潮・墓碑銘)

「マイペースで、周りを気にせず、後を顧みず好きなことをしていました。」

「かなり気をつけて、暴飲暴食せず、何をするにも節制型。夜は早く寝て、冷たいものや熱すぎるものは食べない。庭で野菜を作るのが好きでしたが、庭仕事で疲れると胃腸も疲れているだろうから、ご飯八分目にしておこうとか。そのほかに、午前中が勉強なら午後は庭仕事というように、毎日身体を動かしていました。しかも、庭仕事をしても疲れた様子がない。中学5年間、1日も休むことがなかったそうで、基礎体力がしっかりしていたのでしょう。」

親を見るに、子にしかず、というか、実によく観ておられたと思う。

(2) 秘書・原田勉の証言 (百歳からの人生)

近藤先生が90歳から106歳まで、秘書として仕え、その生い立ちから生涯にわたる人生を聞き書きしたなかで、健康法だけをあげると次のようになる。

1, 良く歩くことに努められた。

幼いころは病弱だったが、中学時代から徒歩通学往復10キロ余の道を、無遅刻、無欠席。冬は剣道の寒稽古、学校の軍事教練にも参加し、五年生のときには、全学野外演習では小隊長になった。

このときの歩く習慣は百歳を超えても、片道、バス・電車・バスで農文協図書館に一人で通勤するという形になって続いた。第一の健康法は歩くこと。これは一貫して強調され、教え子にも伝えられた。とにかくタクシーに乗ることは嫌いであった。

2, 規則正しい生活と栄養を考えた食事

毎朝7時起床。自分で布団をあげ、雨戸を開ける。これは運動のため必ず続けた日課。その後、降圧剤を飲んで朝食。

朝食は、米のご飯とみそ汁に野菜や卵など具が豊富に入ったもの。これは奥さんが栄養家政学専攻だったこともあり、生涯を通じてバランスの良い栄養食だった。これが老後の健康を支え、病気の回復も早かった基礎だった。これはホームドクター毛利研磨さんの証言である。歯が丈夫だったのは母から伝えられた資質で、死ぬまで自分の歯で病院の食事でも残さず食べていた。

3, 睡眠時間は、毎日9時間。

昼食後の昼休み、30分から1時間の午睡は大学の研究室時代から続いていた。夜は9時ごろ就寝、寝つきを良くするための「全身指圧10分」頭から足まで全身の要所を指圧し、身体の凝りを和らげる。

* <長寿の秘訣>寝つきがよくなる「全身指圧法」(写真入り) 参照

<http://nazuna.com/100sai/shiatu01/>

これも25年間続けた健康法だった。

以上、まとめると、

よく歩き、よく学び、よく食べ、よく寝ることを貫き、最後まで生きる意志を捨てなかった。これが近藤先生の遺訓である。

晩年の生き方は天寿に至る死に方の見本でもあった。死ぬまで精一杯に生きる。その意志が最後の一年間永患いをしなかったことで証明された。

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人

原田 勉

tom@nazuna.com

<http://nazuna.com/tom/>

<野火止用水開通の風景> その2 用水通水3年説

榎本の萬之覚(よろずの覚え)によれば「承応四末三月廿日時分、野火留へ水流れ初り申候。ほり初めが二月の十日時分より初り申候。堀長さ四里程可有候。水上より野火留迄卅間程ひくし。水上は江戸の水道之わりさり也。堀ノ口は深みニ仍不定、しきは三尺ニ極り申候」とある。一方、白石の「紳書」による通水の様子は昭和のはじめ、小学校の教科書にも紹介されていた。

「・・・工事ハヤガテ見事ニ落成シタガ、シカシ意外ニモ一滴ノ水モ流レテ来ナイ。信綱ハ之ヲ見テ、安松ヲナジルト、安松ハトニカク明年マデノ猶予ヲ願ヒ出タガ、翌年ニナツテモ水ガ、ヤハリ来ナイ。ココニ至ツテ、信綱ハ安松ガ地勢ノ高低ヲ考ヘズニ、工事ヲ進メタモノトシテ、其ノ手落ヲ責メタガ、安松ハ尚自分ヲ信ジテ疑ハナイ。元来此ノ付近ハ、土地ガ乾キ、風ガ烈シイタメニ、コレマデ非常ニ土ボコリガ多く、客ノアル場合ニハ、必ラズ座敷ヲ掃イテ入レナケレバナラナクッタ。然ルニ今年ハ、ソナ事ガ全クナイ。ノミナラズ、野菜ノ出来ノヨイノモ、例年ト異ナツテキル。コレハ水分ガ地ヲウルホシテキル

タメデ、確ニ彼ノ堀ノオ陰ニ違ヒナイ。何トゾ更ニ一年ノ猶予ヲト願ヒ出タ。然ルニ翌年ノ夏、一夜大雨ガ降ルト、奔流ガ水音高ク進ミ来ッテ、忽チ六里ノ堀ニミナギッタトイフ。……」(志木市郷土資料館野火止用水の資料)

榎本(当時 30 才)は川越街道を通過して江戸にしばしば行商に行ったから、野火止でこの用水を何度も横切ったはずだ。玉川上水から野火止までは約 4 里である。その用水の高低差を起点から平林寺正門の標高差(53.8m)にとれば記載(30 間≒54.5m)とほぼ一致する。街道では多くの人から情報が得られたから、通水の話も信頼性は高いであろう。

一方、白石は用水開通時には生まれていないので、記述は伝聞である。しかし当時の武蔵野の風土を描写し、開拓地の強風と関東ローム台地の特徴をよく表している。なかでも地勢の高低、強風、土の乾燥による土埃の多いことに触れ、今年はそれがほとんど無く、野菜もよくできる、と言っている。このところは周辺土壌に与えた畑地灌漑の効果がよく描かれている。周囲の生態変化や大雨への着目は博物学者としての白石を表している。

以上のように工事期間 40 日の完成直後に通水できたとする記録と、3 年もの長い間通水出来なかったという 2 つの説がある。これを現代流に解析するとどうなるであろうか。

山崎農研会員 電子耕編集同人 安富 六郎

y.nouken@taiyo-c.co.jp

<老兵の戯言> 研究のねつ造

韓国から初のノーベル賞候補の呼び声高く、小学校の教科書にも載っているほど著名な科学者、「韓国の星」でもあった、ソウル大学の黄教授の研究が多くの「ねつ造」であった、と云う報道は、奇しくも、筆者に悪夢を呼び起こさせた。30 数年前、北米に留学した時、筆者は「ねつ造」研究の証明実験をやらされたことがある。

当時、耳にしたのは「信じられない」巧妙なテクニックであった。考えてみると「実にうまい」ことをやったもんだ、と感心し、苦笑した。研究者なら、容易に想像できると思うが、「ねつ造」された研究では、「追試」で、絶対に

できないことが、必ず「一つ」ある。それは「ブレイク・スルー」と呼ばれる。

今回の研究は「誰しも」考えることで、それほど難しいことではない。にも拘わらず、なぜ「発覚」したのか。それは、黄教授の人間性、すなわち「DNA」である。これまで、筆者が、見たり聞いたりした「ねつ造」研究者には、ある「共通点」がある。それが「遺伝子」である。

しかし、この「遺伝子」を持っている人が、必ず「ねつ造」する、ということではないが、「ねつ造」する研究者は、必ずこの「遺伝子」をもっている。長い間、共に研究をしていると、その「気」になれば、容易に見抜くことができる。ところが「証拠」がなければ、「絶対」に「ねつ造」だ、ということはいできない。そこが「泣き所」である。

多くの研究者は、何か「成果」を出したい、と云う気持ち強く持っている。そのために、例えば「1」を「3」にする時がある。筆者は、留学生で、そんな経験をした。問い詰めたら、「先生は、なぜ、そんなに厳しいのですか」と言った。裏を返せば、「厳しくない教師が、大学にいる」ことになる。研究の世界では、常に「真実」と「虚偽」が交錯する。

藤原 昇

山崎農業研究所会員・中国・浙江大学・客座教授

y.nouken@taiyo-c.co.jp

<編集後記> 117号から引き継いで2年4ヶ月余り60号目です。

父、原田勉元編集長から山崎農業研究所&編集同人が編集を引き継がれ60号目になりました。ここまで続けられたのも原稿執筆者・編集部員のみなさんの努力のおかげです。ありがとうございます。

<引き継ぎ第一号>

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第117号

—原田勉から引継いだ環境・農業・食べ物など情報の交流誌—

2003.09.11（木）発行 山崎農業研究所&編集同人

<http://blog.mag2.com/m/log/0000014872/75671622?page=4#75671622>

これからもよろしくお願ひします。

昨年暮れは、中学時代の同級生ふたり（48歳）が相次いで病氣急逝し、たいへん悲しい想ひをしております。

現在、懇意にしていたひとり（元貨物船一等航海士）

↓団地の庭の家庭菜園好きだった彼の写真日記

<http://photos.yahoo.co.jp/ozmaarmstrong/>

のパソコンに残された日記や写真などを元に、ご遺族の承諾を得て追悼文集を作成中です。4月の「偲ぶ会」の準備に忙しくしています。

彼がウチの家族のために作ってくれた取れたてのグリーンアスパラの

それは美味しかったことが忘れられません。

編集同人・なずなコム

原田太郎

<http://www.nazuna.com/>

◎お願ひ「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。

2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。

3、1回1テーマ、10行位に。

4、ホームページを持っている人は、文末に URL を。

5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

◎投稿アドレス変更のお知らせ

電子耕への投稿アドレスは、117号から発行人の変更に伴い、

y.noken@taiyo-c.co.jp

となっております。投稿される方はこちらのアドレスをお願いします。

次回 178号の締め切りは02月17日、発行は02月22日の予定です。

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

書名：岩波アクティブ新書 45『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：735円 発行日：2002年10月4日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第177号

最新号・バックナンバーの閲覧

<http://blog.mag2.com/m/log/0000014872>

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

購読申し込み／解除案内

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html

2006.02.11（日）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp>

*****ここまで『電子耕』*****